

詩 心を洗うために

karinomaki

リサイタル

今まで、私が知っていたどの音ともちがう
ピアノとは、こんなに心を打つ楽器だったのか・・・
それまで、生きることから逃げ続けていた私の姿勢が変わり、
次の日から世界は色づいて、人々が強く、優しく見えた。
そのリサイタルは、私の人生を変えた芸術だった。

しかし、そのあと私は再びすさみ、また世の中を恨んで生きていた。
その私に目を覚まさせたのは、人々の優しさだった。
人生の舞台は、きっと、優しさの芸術だ
あのリサイタルが心のとびらをたたいたのも、
ピアニストがピアノを愛していたから・・・
ピアノは愛されて幸せな夢を届ける
心優しい人々も、悲しい人を夢の世界へ連れ出す。
全てを乗り越えるのは、愛だけではなく、厳しさも必要だろう。
そう思って色んな人を心でさばき、一人で生きていた私は、
人生のリサイタルを生きていなかった。
愛がないと、人の心のとびらはたたけない。
本当の芸術を知りたいと願って生きていこう。
この世に生きる苦しきまでも愛するために

ピアノ

ピアノよ、君のところにまた帰ってきたよ
君は誰よりも、僕の心を知っていた
あんなに僕たちはひとつに溶け合っていた

僕が悲しいとき、うれしいとき、どんなときも君といると、
君の心が僕の指先から伝わってくる気がしていた
でも、本当の君は、僕自身の中にある
それが、君と離れて長い旅をして僕が出した答えなんだ

そんなこともわからないほど、君に依存していた僕は、
きっと芸術家じゃなかった

君のかぶったほこりをはらうゆとりもなく、
ふたをあけ、がむしゃらに弾きはじめる・・・
今までのさびしさ、空白が一気に埋まっていく
もうはなしたくない！！
また離れることがあっても、僕は今の至福を決して忘れはしないだろう。

君は常に、僕とともにある。

哲学者

偉大な哲学者

あなたの存在は、山のように私の前にそびえる
川のように私の中を流れる
打ちつける滝のように、私のまどろみをやぶる・・・

彼はきっと思っている

私達の世界は、どこもかしこも仮の宿りで、
私達はどこにいても進み続けなければならないのだろう。
常識の果てに天国があるとしても、
そこが果たして安住の地であるのだろうか。

彼は世界を誰よりも愛している。

それはきっと、終わりが無いからではないのか。
ハッピーエンドが無いから世界はこんなに深く、
仮の宿りであるからこそ、哲学を永遠に続けて、
本当の世界を目指していくのではないか・・・

彼を心から尊敬する。

どこにも行かないでほしいなどと思わない。
どこまでも言ってほしい。
本当の世界など、天国などなくていい。
彼が進み続けるのを見守るために。

失恋

僕は、公園のベンチで泣いている少女を見かけた。
きっと失恋でもしたのだろうと思ってしばらく見守っていた。
夕暮の公園で、人通りも少なく、少女はさびしげだ。
そのとき、雲がひき、夕日がさっと差し込んだ。
きれいな夕日だった。

それを見て、少女はするどい目をしてにこっと笑った。
「明日こそ、いい日になる。」
そう言っているみたいだった。

僕は心の中で語りかけた。
「生きているのは痛いね。
でも、君の眼差しは、何かをつかむことのできる眼だよ。
がんばれ。負けるな。」

僕は宝物を手にしたような気持ちで帰途についた。
こういう、強く、弱い人に、
涙が一発で止まる、魔法のハンカチを差し出せる人間になろうと思った。
それは、僕がその子からもらった生きる目標だった。

哲学の道

秋の紅葉の中、一人で哲学の道を歩いた。
私は人に愛されたくて哲学をした。
はるかかなたの哲学者にあこがれて哲学者を目指した。

でも、あなたはひとりぼっちだった。
私もひとりぼっち。
愛されたくて哲学をしたのですか？
ちがうでしょう。

愛したくて哲学に夢をそそいだのでしょうか。
それなら、私も孤独なこの道を愛そう。
あなたのかけた夢の、この哲学の道を。